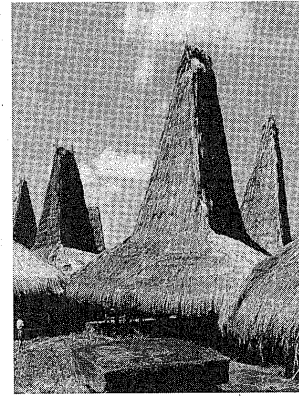


巻 頭 言

満開の桜の花とともに、今年も新入生が入ってきました。生活環境学科に163名、生活文化学科に102名、短大二部に14名、元気印の学生です。彼女たちにとって有意義で素晴らしい4年間、または2年間であることを祈っています。

さて、先日、小松義夫撮影の「地球生活記（世界ぐると家めぐり）」（福音館書店）という写真集を眺めていると、家という固定観念がくつがえされるような住まいが次から次へと登場します。その土地の風土と文化が融合したような家で、私たちが想像もつかない地域にも人は住むことを知りました。

一番印象に残ったのは、インドネシアのスンバ島にある、屋根が細長く伸びた不思議な形をした家で、天井裏には神が宿るというもの。スンバ島は赤道の少し南、オーストラリア大陸に近いところにあります。島の東半分は大陸からの乾いた風の影響で樹木が少なく、森がある西スンバの小高い丘の上には天を突き刺すような屋根が並ぶ村落が点在しています。家の中心の囲炉裏周辺には木の柱があるのですが、残りはすべて大量の竹を複雑に組み合わせて造られているのです。たっぷりとした草で葺かれた屋根の内部は空っぽの空間、そこは神様の場所で、人間はその下で過ごします。床下は家畜の居場所で、庭先に先祖の墓があります。神様、人間、家畜、ご先祖様、みんな共存して暮らしているのです。



造形の美しさにみとれ、現代でも、この地球上に、こんなプリミティブで力強い、シンプルな住まいで生活をしている人たちが存在することに感動しました。IT時代になって、利便性は高まったけれど、どんどん人間性が失われていく状況の中で、最も人間らしい生活を送る人たちの笑顔の美しさに惹きつけられました。私たちの想像を超えた世界がまだ地球にはあることに驚くとともに、ホッとする限りです。

「環境共生」「サステナブル」「スローライフ」という言葉をよく耳にしますが、それらを声高に強調しなくても、自然に実行している社会があるのです。

現在、毎日のように放送されるイラクのことを考えるとき、ある国の尺度で他の国の幸福を計ることの虚しさを感じます。それぞれの国の気候風土に培われた文化を尊ぶ姿勢がその国の品格を表しているように思われてなりません。

ある国の文化や思想を形にしているのがじつは住まいなのです。今、私は猛烈にイラクの住まいを解説したい、いや知らねばならないと思っています。

（生活環境学科長 竹田喜美子）